

新基地建設反対名護共同センター ニュース

国の税金の一番の無駄遣いは辺野古の海の7万1千本の杭打ち工事



おながクミコ氏



おながクミコ氏は、辺野古新基地建設反対デニーリー知事頑張れの活動で、辺野古の海を7万1千本の杭打ち工事で汚染する無駄遣いを強く批判しました。彼女は、「心がひきつぶされる思い」と怒りをにじませながら、工事の早期中止には、自民党政権打倒と市政転換が必要と強調。「おながクミコ市長をぜひ実現させてほしい」と強く訴えました。集会に先立ち、クミコ氏は、「渡久知武豊現市長のままで市政がますます国言いなりとなり、子どもたちに基地という負の遺産を背負わせることになる。初の女性市長として押し上げてほしい」と訴えた。

一九四八年に韓国・済州島で発生した「四・三」事件を専攻し、沖縄の歴史を学ぶために訪れた済州大学の学生十五人も集会に参加した。同大の高誠晚教授は「皆さんからいろいろな力や応援を頂いた。済州に戻つてその力を生かしたい」と語った。

玉城デニー県知事からは、「高市総理の『非核三原則』の見直し発言は、日本の戦後の安保政策の大きな転換となり、これまで我が国が進めてきた『核兵器のない世界』への取り組みに逆行するものと危惧するものである。世界で唯一の戦争被爆国である日本として、あらゆる核兵器の廃絶に向けて、国際社会を主導する役割を果たすべきである。本日の県民大行動を主催されたオール沖縄会議の皆様、それぞれの地域から、こらからの未来について考え、立ち上がり、行動し、共に歩んで行かれるごことを祈念する…」のメッセージが寄せられた。

「辺野古新基地を造らせないオール沖縄」は、十二月六日(土)に名護市辺野古の米軍キャンプシュワブゲート前テントで第五十四回県民大行動を実施し、五六〇人余が参加した。

稻嶺進共同代表は、辺野古埋め立ての土砂を運ぶダンプの台数が増えているとして、「心がひきつぶされる思い」と怒りをにじませながら、工事の早期中止には、自民党政権打倒と市政転換が必要と強調。「おながクミコ市長をぜひ実現させてほしい」と強く訴えました。集会に先立ち、クミコ氏は、「渡久知武豊現市長のままで市政がますます国言いなりとなり、子どもたちに基地という負の遺産を背負わせることになる。初の女性市長として押し上げてほしい」と訴えた。

「具志堅徹さんの足跡」 発行記念のつどい (11/23)

具志堅徹さんあいさつ

みなさんにお世話になって、みんなに支えて頂いて、この人生を全うしました。(大爆笑) 慌てないでゆっくり・ゆっくりとナゴンチュウ、ウチナンチュウのためにふんばっていきたいなと思っております。

今の政治の状況は、総理大臣が戦争を準備するなかで非核三原則はいらないという大変な動きになっている。こういうなかで私たちは何をすべきか、という思いを込めて今日はみんなに集まって頂きました。イッペーニヘーデービル。

この冊子に書いてあるように、地球的規

赤嶺衆院議員、具志堅徹、おながクミコ、小池書記局長 (1/25日投票の名護市長選予定候補) 挨拶



模で、宇宙的規模で私たちの一生は百歳。百歳なんて一瞬です。私たちは日本の政治をどう見ているか?日本の歴史を学んだのかどうか?ということを始めたもの

になっています。けつて戦争は許さないという思いをみんなに広げたいなと思っています。来る市長選で必ず勝利しましょう。冊子の問合せ先 党北部地区 0980-52-5005

沖縄基地問題を学び、辺野古埋立反対集会に参加して感じたこと



と思います。



辺野古の浜辺には、海を埋め立てる工事現場の向こうに、透き通った青い海が広がっていました。その海を守ろうと、雨の中でも集会に参加し、歌を歌いながら訴える人々の姿に胸を打たれました。彼らは単に「反対」と叫ぶだけでなく、沖縄の自然や文化、そして子どもたちの未来を守りたいという思いから行動しているのだと感じました。

また、沖縄だけが過重な基地負担を背負う構造は、私たち一人ひとりの無関心とともにつながっているのではないかと考えさせられました。現地での学びを通じて基地問題は決して「沖縄だけの問題」ではなく、「日本全体の課題」であると強く感じました。今回の体験を通して、ニュースで見るだけでは分からぬ現場の現実と、人々の願いに触れることができました。今後もこの問題に関心を持ち続けて、自分にできることを考えていきたい

私は今回、沖縄の基地問題について学び、実際に現地を訪れて辺野古の埋立反対集会に参加しました。新聞やニュースで「基地負担の不公平さ」について知つてはいましたが、現地で人々の声を直接聞くことで、その重みを実感しました。

前回、今回を通じて感じたのは普天間基地や辺野古の周辺に住む人々の日常に、基地の存在がどうほど深く入り込んでいるかということです。飛行機の騒音、事故への不安、土地の制限など、基地の影響は想像以上に大きなものでした。観光地としての美しい海や自然の裏に、こうした現実があることを改めて知りました。

辺野古の浜辺には、海を埋め立てる工事現場の向こうに、透き通った青い海が広がっていました。その海を守ろうと、雨の中でも集会に参加し、歌を歌いながら訴える人々の姿に胸を打たれました。彼らは単に「反対」と叫ぶだけでなく、沖縄の自然や文化、そして子どもたちの未来を守りたい

東京土建一般労働組合調布支部
副執行委員長 索谷 武洋